

唐代の郡望表(上)

——九・十世紀の敦煌寫本を中心として——

池田 溫

まえがき

I 敦煌發見氏族資料の問題

1 資料の解説——A(九號字七)・B(P.3516A二號字)——

2 從來の研究

3 貞觀氏族志とAの關係

4 A・B後文の虚構性

II 郡望表の概念

1 文獻に傳えられた郡望記載

まえがき

III 郡望表の性格

- 一 太平寰宇記所載郡姓
- 二 古今姓氏書辨證所收郡姓
- 三 廣韻所載姓望(以上本號)
- 2 郡望表の概念(以下次號)

1 通俗性・普及性

2 歴史的背景

3 史料的价值

一般に六朝より唐初へかけての時期は、中國史上特異な門閥貴族の時代と考えられている。政治的分裂及び北方民族侵入による中央皇帝權力の相對的弱體化がその基盤をなしたとはいえ、當代の門閥貴族の果した社會的役割を何人も輕視することとは出来ないであらう。そこでこれら六朝門閥のあり方を説明することが當代史研究の一の眼目をなすともいえる程であるが、目下根本的に重要な幾多の課題が解決を將來に待っている状態にあると稱して過言ではあるまい。というのも一つには

八世紀以後五代末初にわたる大規模な社會變動により門閥貴族が全く歴史の表面から姿を没してしまい、従つて彼等の残した基本資料——家譜・家傳若くは氏族志の類——も殆んど湮滅に歸したからである。それ故宋以後の學者の關心が門閥の史的 연구に向けられることは例外であり、清朝考證學の龐大な成果の中にも門閥の系譜的あとづけなどはまことに寥々たる存在にすぎない。ところが幸い十數年來この方面にも漸く専門の研究家が力を致されるようになりつつあり、宮川尙志⁽³⁾・守屋美都雄⁽⁴⁾・竹田龍兒⁽⁵⁾・宮崎市定⁽⁶⁾・矢野主税⁽⁷⁾諸氏、或いは王伊同⁽⁸⁾・岑仲勉⁽⁹⁾・ウォルフラム⁽¹⁰⁾・ハーハルト⁽¹⁰⁾諸氏など、幾多の勞作によつて今後の發展への貴重な礎石を提供されている。かような研究にとつて、同時史料に准ずる價值のある敦煌文獻中の關係資料が貢獻する所頗る大きいといえよう。なかんずく門閥氏族の全國的一覽表ともいふべき敦煌資料は夙に注目され、特に氏族の範圍ひいては身分制の問題に關連して重要な提言がなされている。この點は門閥貴族の社會的性格を考えるに肝要な論點といわねばならない。本篇ではこれら敦煌資料に對する從來の諸説をいま一度検討することを通してその史料性性格を幾分とも明らかにし、更にそれを生み出した背景を推察してゆきたいと思う。それ故、直接に門閥貴族を取上げる譯ではないが、現存の資料の性格を考えると、間接的方途を通じて多少とも當代社會の理解を深め得れば望外の幸である。

I 敦煌發見氏族資料の問題

1 資料の解説

敦煌からは氏族關係の資料として「敦煌名族志」⁽¹¹⁾や「敦煌汜氏家傳」⁽¹²⁾の殘卷なども發見されているが、當面の對象となる門閥氏族の全國的一覽表の類は左の四種が知られている。

A 國立北京圖書館所藏 位字七九號

B プリティッシュ・ミューシウム所藏 S 五八六一號 (四斷片)

ビブリオテク・ナショナル所藏 P 三一九一號

C プリティッシュ・ミューシウム所藏 S 二〇五二號

D ビブリオテク・ナショナル所藏 P 三四二一號

右の四種の中、本篇の論述の中心となるのはA・B二點であり、C・Dは同類の氏族文獻として副次的に考慮されるに留まるであらう。そこで順序としてまずA・B兩者の全文を左に移録して以下の敘述に便することとする。

Aは既に向達氏(國立北平圖書館刊六一、五七、九頁、一九三三)、許國霖氏(敦煌雜錄下輯、一五三、表、四裏、一九三七)、牟潤孫氏(文史哲學報三、附業、一九五一)三者によつて移録

され、又仁井田陞先生の手で前二者に關し校勘の加えられた原文が示されている(支那身分法史、二一六、九、二二四頁、一九四二)。別に古く繆荃孫

氏も本殘卷の文字の誤脱を多數指摘訂正されている(辛壬癸卷三、四表、一九一一・二)。今さし當り、個々の文字は向達氏に従い、體裁は

許國霖氏に依つて原文を寫し、後に繆・許・牟諸氏との重要な異動を注記して參考に資する。但し單なる字體の相違は原則

として取上げず、又文字の大きさ、改行箇所、行間、書寫形式などは、原本・寫眞共に接し得ない現在一切確かめられない

ことをおことわりしておく。

A (位字七九號)

() 前

缺

()

1 □^①陽郡三姓 并州 儀景魚

2 鴈門郡三姓 岱州^② 續簿解

3 中山郡一姓 恒州^⑤ 甄

太原郡十一姓

上黨郡五姓

□^③

潞州^⑥

閭鮮于令狐尉^④

包鮑連赫連樊

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4
魯國郡七姓	東平郡三姓	高平郡五姓	濮陽郡六姓 ⁽³⁶⁾	齊陽郡三姓 ⁽³²⁾	梁國郡三姓	陳留郡四姓	滎陽郡四姓 ⁽²⁴⁾	弘農郡四姓	黎陽郡二姓	趙郡二姓	內黃郡一姓	河澗郡一姓 ⁽¹¹⁾	范陽郡三姓	高陽郡四姓	康平郡四姓 ⁽⁷⁾
兖州	兖州	兖州	濮州 ⁽³⁷⁾	曹州	宋州	汴州	鄭州	鄆州 ⁽¹⁹⁾	衛州 ⁽¹⁶⁾	趙州	相州 ⁽¹⁴⁾	濮州	幽州	冀州	冀州
夏孔車唐 ⁽⁴²⁾ 曲梁 ⁽⁴³⁾ 齊	萬呂畢	郤檀徐曹孫	吳徐表 扶黃慶	蔡丁江	宋喬張	元謝衛虞	鄭毛潘陽 ⁽²⁴⁾	楊劉張賁 ⁽²⁰⁾	璩桑 ⁽¹⁷⁾	李睦	扈	邢	盧鄒祖	紀公孫耿夏	宋焦啖游
平陽郡一姓 ⁽⁴⁴⁾ ⁽⁴⁵⁾	山陽郡三姓	濟北郡一姓 ⁽³⁹⁾	濟陽郡五姓	汝南郡七姓	誰郡國八姓 ⁽²⁸⁾	東來郡三姓 ⁽²⁶⁾	潁川郡七姓 ⁽²⁴⁾	南陽郡十姓	河南郡七姓	河內郡九姓	平原郡三姓	錐鹿郡三姓 ⁽¹²⁾	清河郡七姓	上谷郡四姓	渤海郡四姓 ⁽⁸⁾
兖州	兖州	洛州 ⁽⁴⁰⁾	濟州	□州 ⁽³³⁾	亳州 ⁽²⁹⁾	□州 ⁽²⁷⁾	許州	□州 ⁽²¹⁾	潞州 ⁽¹⁸⁾	懷州	德州	邢州	貝州	燕州	冀州
孟	功革郡 ⁽⁴¹⁾	汜	董禾 ⁽³⁸⁾ 丁都苗	荆梅 ⁽³⁴⁾ 昌表 ⁽³⁵⁾ 應和	戴夏侯矩嵇曹婁 ⁽³¹⁾	費盛上官	陳荀韓鍾許庚庫 ⁽²⁵⁾	張樂趙滕井何白 ⁽²²⁾ 鄧姬	穆祝	宋司馬荀向浩淳于東 ⁽¹⁵⁾ 尋賀蘭丘士	師雍封	莫槐時 ⁽¹³⁾	路勒 ⁽⁹⁾ 崔張房向傅綏榮侯麻 ⁽¹⁰⁾	吳歐陽高刀	

35	34	33	32	31	30	29	58	27	26	25	24	23	22	21	20
以前大史因堯置九州今爲八千五百郡合三百九十八姓今貞觀八年五月十日壬辰	武都郡一姓	武陵郡二姓	尋陽郡二姓	臨海郡四姓	丹陽郡四姓	餘康郡三姓	吳興郡七姓	會稽郡七姓	廣陽郡三姓	下邳郡四姓	瑯琊郡六姓	彭城郡五姓	臨留郡三姓	樂安郡七姓	太山郡四姓
	果州	□州 ⁽⁷³⁾	江州	台州	潤州	杭州	胡州 ⁽⁵⁷⁾	越州	楊州	泗州	沂州	徐州	青州	青州	兗州
	舟 ⁽⁷⁶⁾	供件 ⁽⁷⁴⁾	陶翟	屈譚請弋 ⁽⁸⁵⁾	紀甘許左	金褚花	姚明丘紐間 ⁽⁵⁸⁾ 施沈	虞孔賀榮 盛鍾離 ⁽⁵⁵⁾	戴高盛	陳郤谷 ⁽⁵¹⁾	王顏諸葛 惠符 ⁽⁴⁹⁾ 徐	劉曹袁行受 ⁽⁴⁸⁾	史寧左	薛門蔣 孫任高 ⁽⁴⁶⁾ 元	胡周羊鮑
	南安郡五姓	長沙郡四姓	豫章郡五姓	松陽郡四姓	東陽郡五姓	鹽官郡三姓		吳郡四姓	長城郡一姓	東苑郡四姓 ⁽⁵²⁾	蘭陵郡一姓	沛郡三姓	成陽郡二姓	千乘郡一姓	平昌郡一姓
	泉州	譚州 ⁽⁷⁵⁾	洪州	括州 ⁽⁸⁶⁾	婺州 ⁽⁸⁵⁾	杭州 ⁽⁶¹⁾		豫州 ⁽⁸⁶⁾	胡州 ⁽⁵⁴⁾	海州	徐州	徐州	□□ ⁽⁴⁷⁾	青州	兗州
	黃林單仇盛	劉茹曾秦	熊羅章雷湛 ⁽⁷²⁾	黃瀨曲豆 ⁽⁷¹⁾	留難 ⁽⁷⁰⁾	岑鄔臧 ⁽⁸²⁾ 荊 ⁽⁶⁹⁾ 姚 ⁽⁶⁷⁾ 習黃		朱張顧陸	錢	臧關竹刀	蕭	朱張周	成蓋	倪	管

- 36 自今已後明加禁約前件郡姓出處許其通婚媾結婚之始非舊委怠必須精加研究
知其囊譜相承不虛然可爲足其三百九十八姓之外又二千一百雜姓非史籍所載⁽⁷⁹⁾
- 37 雖預三百九十八姓之限而或媾官混雜或從賤入良營門雜戶募容商賈之類雖有⁽⁸⁰⁾
- 38 譜又不通如有犯者剔除籍光祿大夫兼吏部尚書許國公士廉等奉⁽⁸¹⁾
- 39 勅令臣等定天下氏族若不別條舉恐無所馮准令詳事訖件錄如前 勅旨依奏⁽⁸²⁾
- 40 大蕃歲次丙辰後三月庚午朔十六日乙酉魯國唐氏苾莪悟眞記勘定⁽⁸³⁾
- 41 ①□；繆讀晉。 ②岱；繆云當作代。 ③□□；繆云當作并州。 ④以上八字六空格；繆云止存閭鮮于令狐⁽⁸⁴⁾（當作狐）尉遲。許
作于令狐尉四字。 ⑤恒；許作垣。 ⑥潞；許作路。 繆讀路而云當作潞。 ⑦康；許作廣。 ⑧渤；許作潮。 ⑨毅；許
作毅。 牟作遯。 ⑩麻；許作上林。 ⑪潤；繆云當作閒。 ⑫錐；繆云當作鉅。 ⑬槐；許作魏。 繆云當作魏。 ⑭相
；牟作和。 ⑮東；繆·許共作東。 ⑯衛州；許作鄧州。⁽⁸⁵⁾ ⑰璩；許作儋。 ⑱潞；繆云當作洛。 ⑲郭；繆云疑當作郭；
通號。 ⑳賁；繆云或當作晉。 ㉑南陽郡十姓□州張云々；繆作南陽十姓州張云々，而云州名鄧州當補，原存州字當是姓字。
㉒白；繆作同。 ㉓榮；許作榮。 繆讀榮而云當作榮。 ㉔穎；許作穎。 ㉕庚；許作庚。 ㉖來；繆云當作萊。 ㉗□；
繆云當作萊。 ㉘誰郡國；許作譙郡國。 繆云當作譙國郡。 ㉙毫；牟作毫。 繆讀毫而云當作毫。 ㉚桓；許作桓。 繆
讀桓而云當作桓。 ㉛嵇以下四字；許缺。 ㉜齊陽；繆云當作齊陰。 ㉝□；繆云當作豫。 ㉞殷；許作啓。 ㉟表；繆云
當作表。 ㊱漢；許作漢。 繆讀漢而云當作漢。 ㊲漢；許作漢。 牟作郭。 繆云當作漢。 ㊳禾；許作禾。 繆讀禾而
云當作桑。 ㊴北；許作比。 繆讀比而云當作北。 ㊵洛；繆云當作溜。 ㊶郡；繆云當作郡。 ㊷唐；許作庚。 ㊸栗；
許作栗。 ㊹平陽；繆云疑是濟陽之誤。 ㊺郡；許缺。 ㊻高；許作商。 繆讀高而云當作商。 ㊼□□；繆云當作沂州。 ㊽

行；繆・許共作引。 ④苻；許作符。 ⑤逕；許作途。 繆讀逕而云當作邳。 ⑥囿；繆云當作國。 ⑦苑；繆云當作莞。
 ⑧陽；繆云當作陵。 ⑨胡；繆云當作湖。 ⑩離；許作雅。 繆讀雅而云當作離。 ⑪豫；繆云當作蘇。 ⑫胡；繆云當作湖。
 ⑬間；許作聞。 ⑭康；繆讀唐而云當作杭。 ⑮鹽；許作監。 ⑯州；許缺。 ⑰威；牟作蕨。 繆讀威而云當作威。
 ⑱丹陽；許作舟湯。 繆讀舟陽而云當作丹陽。 ⑲姓；許作往。 ⑳嫫；繆讀嫫而云當作嫫。 ㉑苑；繆云當作列。
 ㉒姚；許作姚。 繆讀姚而云當作姚。 ㉓請；許作靖。 ㉔括；繆・許共作括。 ㉕瀨；繆・向共云當作賴。 ㉖曲豆；向云當是豐字之誤分。
 ㉗熊；許作能。 牟作態。 ㉘□；繆云當作朗。 ㉙供；繆云當作拱。 ㉚譚；繆云當作潭。 ㉛舟；許作舟。 牟作舟。 ㉜千；繆讀十。 ㉝已；許作以。 ㉞囊譜；許作譜囊。 ㉟戴；許作載。 ㊱商；許作高。 ㊲又；許作亦。 ㊳詳；許作許。 ㊴訖；許作小字。 ㊵魯；繆作會。 ㊶苾蒻；許作苾苾。 ㊷勘定；許・牟共缺。 敦煌規餘錄云勘定二字朱書。

なお敦煌規餘錄は本卷について、全三紙、五十四行という（第十三帙五三七）。この行數は恐らく双行に書かれた郡姓を二行として算えたものであろう。

Bは、S五八六一の四斷片とP三一九一の一斷卷が知られている。S五八六一の方は仁井田陞先生によつて全文が移録され（石濱先生古稀記念東洋學論叢 四〇七―九頁 一九五八）、又P三一九一は那波利貞（支那地理歴史大系第七編 支那社 會史 一三三―四頁 一九四一）、姜亮夫（敦煌―偉大的文化寶藏 一―五七頁 一九五六）兩氏によつて別々にその一部が紹介されて來た。今、記載形式・筆跡・内容及び傳存狀態を綜合して考えて、この五斷片は本來一卷をなしていたものが後バラバラに分斷され、その一部分であつた五片だけが偶然殘存したに他ならぬと見て差支えない。S五八六一の四斷片は既に仁井田先生により正しい順序に排列されているが、P三一九一は記載内容からみて前者の第一(a)・第二(c)の中間、更にいえばCの直前に置かるべきことが明瞭である。次に右の五斷片を本來の前後の順序に移録する。

B

(a.c.c.d.eはS五八六一。bはP三一九一)

b					a								
5	4	3	2	1	9	8	7	6	5	4	3	2	1
衛州	懷州	魏州			河東郡賈平陽郡賈武	賈姓三望	河內郡車魯國郡車	車姓二望	中山郡陽熒陽郡陽河	陽姓二望	京兆郡宋河內郡朱廣	宋姓三望	
黎陽郡四姓	河內郡八姓	魏郡五姓	□□葛	□睦							平?		
據桑衛拓	宋向車常尋苟司馬淳于	申暴栢暢婁											

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6
			泗州	沂州	□□	徐州	宋州	滑州	汴州	鄭州	許州	齊州	獨孤	□州		
			下邳郡三姓	瑯琊郡六姓	蘭陵郡□姓	沛國郡三姓	譙國郡九姓	東平郡三姓	陳留郡五姓	熒陽郡四姓	潁川郡八姓	洛陰郡四姓	苗董下邳	河南郡九姓		
						周張朱	戴李石醺曹安桓龐夏	費成公上官	阮謝虞蔡何	鄭毛潘陽	陳韓鍾荀于許庫鱗?			賀褚穆祝蘭丘竇南宮		

c					
6	5	4	3	2	1
湖州二郡長城郡	越州		楊州		海州
	會稽郡七姓	第八江南道	廣陵郡	第七淮南道	東苑郡
				南道一郡	

d					
6	5	4	3	2	1
	鄂州	汴州	泉州	潭州	洪州
第九劔南道	江夏郡三姓	武陽郡□□	安南郡二姓	長砂郡五姓	豫章郡五姓
	□	□	黃	劉	能

11	10	9	8	7
	八載五月十日	大史因堯置九州令分	益州	泉州
			蜀郡二姓	武都郡二姓

6	5	4	3	2	1
聽進	各別爲條舉	甫等	戶商價之類上柱	並非史籍所載或	定偶其三百九十八姓
	□	奏勅令	國	□	

S五八六一は大體仁井田先生の移録により、P三一九一はアメリカのライブラリオウコンGRES所藏王重民氏撮影寫眞から賀光中氏の作製されたマイクロフィルムにより、那波・姜兩氏の記述を参照した。後者は原本の状態がいたみの甚しい故もあつて、マイクロフィルムでは全く判讀不能の部分が少くない。従つて移録は將來の補正にまつ所が多い。

さてA・B兩者を比較すると、已に仁井田先生の論ぜられた如く(同前書四〇九頁十一頁)左の諸點が注目される。A・B共、某郡幾姓として姓を列記し、後文において右に列擧された三百九十八姓の間でのみ通婚を許す旨の文言をもつ。すなわち基本的には共通の機能を有する文獻であることが明白である。但しA・Bは同一文獻の異なるコピーではなく、形式・内容共に少からぬ相違がある。特にAでは貞觀年間の高士廉とある個所がBでは天寶年代の李林甫とある(と推定される)點は重要である。A・Bの内容の詳論に入る前に、一應關聯文獻としてC・Dに一瞥を與えておくのも無駄ではあるまい。Cは「新修天下姓望氏族譜一卷并序」と題され、第一關内道より第九劍南道にわたつて計九〇郡の姓望が列記されている。但しA・Bの如き後文をもたず、又登載された姓數の多い點でも顯著な差異がある。全文は仁井田先生によつて移録されている(同前書四一二頁八頁)からそれを参照されたい。Dは那波利貞(支那社會史一三三頁)姜亮夫(敦煌五七頁)兩氏の記述より伺うと、「始平四姓」雍州 馮龐宣陰 馮氏 承姬姓周文王裔畢公之后」麗氏 承帝□之苗裔 若□□諸楚五子」陰氏 承帝譽之苗裔 □□武丁封爲陰氏遂有陰氏興焉」云々」の如き形式で、以下「扶風六姓(馬寶班輔曾惠)」新平一姓(古)」に及ぶ計二〇行の斷卷の由である。DがA・B・Cと特に異なる所は、各姓の始源を略記していることである。

2 從來の研究

敦煌發見の門閥氏族表に最初に注目されたのは繆荃孫氏であり、一九一二年頃「唐貞觀條舉氏族事件卷跋」(辛壬稟卷三所收)を著し、Aの誤脱を數十條にわたつて指摘訂正すると共に、奥書の紀年を開成元年(A.D. 836)に正しく比定された。しかし以後二〇年間は殆ど學者の注意する所とならず、唯ポール・ペリオ氏がその敦煌文獻目錄においてB(P三一九一)及びD(P三四二二)について共にC(S二〇五二)と相對照すべきを指摘され、或いは陳寅恪氏がAを以て唐代史に關聯する資料と述べられる(敦煌掇瑣錄序一九三〇)などにとどまり立入つた研究には及ばれなかつた。ところが向達氏がAを貞觀氏族志の殘卷に比定さ

れたことが機縁をなして、これが廣く學界の關心をひくに至り、以后管見の及ぶ範圍でも左の十餘篇の諸論致がこれに言及し多様な論點を發展せしめて來ている。

①向達 敦煌叢抄 北平圖書館館刊五一・六・六一六 一九三一・二

②宇都宮清吉 唐代貴人に就いての一考察 史林一九一三 一九三四

③仁井田陞 六朝及び唐初の身分的內婚制 歷史學研究九一八 一九三九

④仁井田陞 支那身分法史 第二章宗族法 二一六—一九頁
第四章婚姻法 五五八—六六頁 一九四二

⑤那波利貞 隋唐五代宋社會史 三 傳統沈滯の社會的弊風打破方針の唐の太宗 一二四—三五頁 支那地理歷史大系第七篇所收 一九四一

⑥守屋美都雄 六朝門閥の一研究—太原王氏系譜考— 一三一—五頁 一九五一

⑦竹田龍兒 唐代士人の郡望 史學二四—四 一九五一

⑧牟潤孫 敦煌唐寫本姓氏錄殘卷考 文史哲學報三 一九五一

⑨多賀秋五郎 古譜の研究 東洋史學論集四 一九五五

⑩Wolfram Eberhard The Leading Families of Ancient Tun-huang. Sinologica IV-4, 1956.

⑪仁井田陞 スタイン敦煌發見の天下姓望氏族譜—唐代の身分的內婚制をめぐって— 石濱先生古稀記念東洋學論叢 一九五八

以上の諸論考によつて指摘された重要な論點を列舉してみると、左の三點がまず注目される、

○A 後文の日付け及び挙げられた姓の總數、更に各郡における諸姓の配列などよりみて、これが太宗の命によつて刪改を経る以前の第一次氏族志とも稱さるべきものに當る。②③④

○A は貞觀氏族志の本文ではなくして、檢索に便する爲に付加された部分若くは目錄總説の部分に相當する。②⑤

○Aの後文は、一定範圍の門閥氏族（三九八姓）の間でのみ通婚を許す身分的内婚制を規定したものであり③④、これはまさにヨーロッパ史上著名な「ゴータ（Gotha）」に比するべき存在である。⑩

そして多くの歴史家によつて、この表に登載された諸姓が貞觀年間に定められた門閥氏族であり、載せられていない諸姓との間には身分的差別が公定されたものと考えられてきた。B・C・DについてももつぱらAとの關連において取上げられたといつてよく⑤⑪、Bは天寶時代に定められた「新修天下郡望氏族譜」に比定され（斷定的表現をとられてはいない）Aと同様身分内婚範圍を明示するものと論ぜられている⑩。以上を通じてみて特に仁井田陞先生の諸論考が、A後文の記載を解明することによつて貴族間の身分的内婚制の存在を明示し當代貴族のあり方を考える者に重要な示唆を與えられていると共に、近時新たにB・Cを紹介され諸資料間の相互關係に見通しを示された點で、最も重要な貢獻をされたものと稱し得よう。しかるに右の諸論とは頗る面目を異にする意見を牟潤孫氏が提出された⑧。牟氏はAの後文を虚構に出ずるものと斷定され、これを貞觀氏族志に偽託された文書に他ならぬと認められたのである。この點はAの史料的人格を根本的に規定する要件であるから、當然我々にとつて充分検討されねばならぬ課題である。そして右の問題に決定的見通しを立て得て、始めてその文言の有する歴史的意義を正當に評價し得ることとなる。

3 貞觀氏族志とAの關係

Aは初め「唐貞觀條舉氏族事件卷」（繆荃孫氏）或いは「姓氏錄」（敦煌規餘錄）と呼ばれていたが、これを貞觀氏族志殘卷と解したのは向達氏が最初である。向氏がAを貞觀氏族志と認めた理由は、A後文に貞觀八年の日付けがあり、且つ高士廉が勅を奉じて天下の氏族を定めこれを列舉した旨明記されている點にある。しかしながら貞觀氏族志に關する文獻所傳は、氏族志が貞觀十二年に天下に公布されたところの一百卷の大部な編纂物であり、且つ九等級に段階付けられた二九三姓

一六五一家を内容として含んでいたとする。⁽¹³⁾従つてAとは、成立年時・所載姓數及び卷數に關し一致しないので、この矛盾を解決すべく、天下に公布される以前に太宗の批判を受けた第一次本のしかも目錄總說乃至檢索の爲の見出しの部分とAを解するに至つたのであつた(宇都宮・仁井田・那波諸氏)。これに對し、Aを貞觀氏族志とは認めない牟氏の論點は、

イ Aが眞の貞觀氏族志の佚文と一致しない。

ロ Aが文獻より知られる貞觀氏族志の體例に合致しない。

ハ A後文に誤脱が多く高士廉の奏によつて公布された文書とは認められない。

ニ 太宗の氏族志編纂の意圖は門閥跋扈の弊を矯めようとする點にあつたから、身分内婚制を強制する如き後文記載とは矛盾する。

の四つに要約されよう。右の中ロ・ハは孰れももつともな指摘であるが、Aを宇都宮氏說以下に従つてこれを氏族志本文とは見ずに附加的部分と認め、他方傳寫の間における誤脱を予想するなら必ずしも直ちに否定に導き得るかはなお吟味を要するであろう。殘るイ及びニに關しては、牟氏の立論には誤解が含まれており到底我々を納得させることは出来ない。次にその點を略述しておこう。

イ、牟氏が貞觀氏族志の佚文とみなされた資料は古今姓氏書辨證に見える「唐貞觀中定、德州平原郡八姓、其一、東方氏也。」^(二)「唐貞觀所定、楊州廣陵郡四姓、其一、曰商。」^(三)といった記載である。大部分は右の形式であるが、やや

異つた例に「唐魏鄭公、定天下諸州姓譜、以崔・張・房・何・傅・靳、爲貝州清河郡六姓。」^(五)「唐魏徵、定天下姓氏、

平昌郡三姓、山陽郡五姓、皆有蓋氏。」^(八)の如きが見える。これらを通觀して注意されることは、貞觀氏族志に曰く、と

いう形をとつておらず「貞觀氏族志」の引用であることを明記した例が一つもない。又「某州某郡幾姓某々」といった内容

以外の記載——例えば系譜・官歴の如き——を全く含まない、の二點である。してみると、Aが文獻所傳の貞觀氏族志の體例に合致しない點は盡く辯證所引の郡姓記載にも同様に當てはまる譯である。さればこれを以て貞觀氏族志の佚文とされる牟氏の議論は頗る腑に落ちないこととなる。では辯證所引の「貞觀所定郡姓」は如何なる素性のものか？古今姓氏書辯證の成立過程をみると、まず鄧名世が五卷本を編しこれには宣和六年⁽¹¹²⁴⁾の高栢の序^(この序は玉海卷五〇所載)を附していたが、後増補して一四卷となしたものを名世は紹興三年十月⁽¹¹³³⁾帝にたてまつり翌四年三月功により右迪功郎となつた^(建炎以來繫年要錄卷六九・七四)。がその後名世の子椿年は更に増訂を加え四〇卷本に大成したのが乾道四年⁽¹¹⁶⁸⁾であつた^(椿年序)。かように二代にわたる長年月の努力修訂の結果生み出された本書は當時から高く評價され、我々もその卷頭にある「括要」や「摠目」を見て編輯者の用意周到なるを伺い得る。特に注目すべきは括要に「凡載某書曰者、皆以舊姓書爲是。新修者、著名世曰、以別之。凡稱謹按、若今詳二字者、皆辨證之文、當從辨證。」と述べられ、舊書を正しいと認めて襲用した部分と、自ら新たに加へ若くは議論した部分を明別してある點である。例の郡姓記載の中に「謹按唐貞觀所定、坻丘郡六姓、其一日獬。」^(卷四)とある例をみると、鄧名世若くは椿年が貞觀所定郡姓の資料を見に必要な書加えを行つたことが知られる。なお坻丘^(丘)郡六姓^(卷一二)及び益州蜀郡三姓^(卷一九)の場合は「唐貞觀所定」と只「唐」と二様に書かれているが、兩者の姓數が全く一致しており他に矛盾する例は見出されないから、「唐」も「貞觀所定」と同列に考えてよからうし、又前述の「唐魏徵定天下姓氏云々」の類も單に表現を換へたに過ぎず「貞觀所定」に含まれると見て差支えないであろう。本書全體で廿數條に上るこれら貞觀所定郡姓記載の多くは編者の辨證増補と認められる部分にある。従つて鄧氏は唐の貞觀年間に魏徵が定めた天下の郡姓を傳える資料を参照し、必要に應じてこれを大體一定の形式で引用したと解される。では鄧氏の参照した郡姓記載は一體貞觀氏族志とどのような關係にあるものであろうか？周知の如く貞觀年間に氏族を定めた事業の代表者は高士廉であり、他に韋

挺・令狐德棻・岑文本等が關係者として傳わつてゐるが、魏徵がこれに關係したことを明記する史料は見出されないようである。この一點からも、貞觀氏族志そのものであるまいと疑わしむるに充分であらう。が更に鄧氏が貞觀氏族志を参照したとは考え難い證據が見出される。それは鄧氏が參稽せる諸資料によつて修改増補した旨を數百姓にわたり注記してある卷頭惣目に、一として氏族志によつたとする例がなく、又本論中にも貞觀氏族志に一度も言及していない事實である。卷頭の序論三に「唐人高士廉・李守素輩、往往採取爲正。云々」と述べられてゐる點も、右の諸點を打消して鄧氏が直接氏族志を參閱してゐたと積極的に認め得る根據とはなし難いであらう。他方貞觀氏族志の流傳という面からも右の想定は充分裏書きされる。高麗宣宗の辛未八年六月(1091)、宋から還つた李資義等が携へた求書目錄を高麗史が傳へてゐるが、その中に「高士廉氏族志一百卷」が含まれてゐる(卷一〇宣宗世家)。この目錄は、當時宋において全佚乃至部分的に關失してゐた書物でしかも重視され、海外にまで搜訪された典籍のリストとして極めて信憑性の高いものといえる。他方崇文總目以下宋史藝文志に至る諸

目の孰れにも、貞觀氏族志は著録されていない。宋代以降の私家の書目についてみても同様である。右によれば、十一世紀末に貞觀氏族志が宮中の書庫にすら存在しなかつたことは明瞭である。その上我々は、開元年間唐の宮室の書庫に全一百卷が收藏されてゐたことを古今書錄の著録によつて伺い得る(舊唐書經籍志乙部雜譜牒條に「大唐氏族志一百卷高士廉撰」とみえる)後には、八世紀半以後この書の

實在を示す何らかの記錄はおろかその引用すらも見出すことが困難である。却つて九世紀初(812)に皇帝の命令によつて行太常博士林寶等の手で編纂された元和姓纂に氏族志を利用した形跡のない點が注目される。本書の撰述には關聯文獻が廣く活用されたにも拘らず、唐朝の勅撰になつた貞觀氏族志やその改訂増補たる姓氏錄(一作姓氏譜)・大唐姓族系錄の類に全く言及がなくそれらを利用しなかつたと推測せしめることは、恐らく當時已にこうした大部な文獻が宮廷にも存在しなかつた事情を示唆するであらう。貞觀氏族志以下は安祿山の亂による首都の混亂に際して永久に失われて了つたものではあるまいか？宋代

以後貞觀氏族志に深い關心を寄せた幾多の人士の論述をみても、彼等の氏族志に對する知識が我々の有する範圍を一步も出していないことが看取される。⁽¹⁶⁾ かような譯で、古今姓氏書辯證に含まれる貞觀所定郡姓の記述を以て貞觀氏族志の佚文とみなす説は、氏族志の體例との不一致、辯證編纂に利用された資料の範圍及び氏族志の流傳の三點孰れより見ても到底成立し難いことが明白となつた。従つてこの貞觀所定郡姓とAとの比較によつて、Aを貞觀氏族志と認めるとか認めないとかいふことは全く無意味と斷ぜざるを得ない。

二、身分内婚制を規定することが太宗の意圖に反するとの議論。太宗が貞觀氏族志を編纂せしめた意圖の中に、山東の名族が家門の高さを誇示し現實の政治的實力に比して過分な社會的聲譽を勝ち得ており、特に婚姻に際して買婚の弊が顯著であつた實情に對する反撥の存したことは、諸史料に明記されている。⁽¹⁷⁾ しかしその對象となつたのは崔・盧・李・鄭など特定の大姓に限られている點を看過してはならない。傳統的な門閥評價の基準を現實の力關係に對應して新たにたてなおし、それによつて新帝國秩序を強化せんとした太宗の意圖は明白であり、しかも國家機關を動員し相當の年月をかけて「氏族志」を編成し、二九三姓一六五一家という多數の氏族をこれに登録せしめ更にそれらを九等に段階付けしたことは、貴族制における身分秩序を如何に重視していたかを示して餘りある。氏族志の編纂は決して門閥そのものの否定を意味せず、却つてその適合的秩序付けを表示している。されば特定の大姓の買婚を禁止するからといつて、決してそれが直ちに貴族と庶民間の通婚制限を一般的に撤廢することとはならないであろう。Aに見られる如き全國的な數百姓の列擧は、かえつて特定の天下の大姓の優越性を捨象した表現たらざるを得ない。従つて太宗が門第の弊を矯めようとした方針と氏族身分内の内婚制を規定することとは、必ずしも矛盾しないばかりでなく、Aに現れた限りでは全く適合的と稱し得るであろう。以上により少くとも牟氏の所論の次元においては、二は説得力を有たないといわねばならぬ。

さて牟氏のAを貞觀氏族志と認めない理由を検討して來た結果イ・ニの兩點は解消し、在來の宇都宮氏説以下を批判するにはロ・ハの兩點を一層つつこんで吟味することが殘された譯である。しかしながらAをば氏族志の付屬的部分―檢索の爲の目次の類―とみなす見解に對して、さきに觸れた氏族志の流傳の點が大きな障害をなすことにここで留意せねばならぬ。貞觀十二年に天下に頒布された氏族志すら八世紀半以後所在が確認されないというのに、刪改を経る前の稿本に過ぎぬ第一次本の一部が、九世紀中葉にしかも吐蕃の支配下にあつた邊隅の敦煌において鈔寫されるが如きは到底信じ能わぬ所である。而して前述の如く「某郡幾姓某々」といつた郡姓の列擧が貞觀氏族志の佚文でないことがはつきりした以上、Aの如き形式の文獻を氏族志と密接に關連付ける重要な根據も失われる譯である。但しA後文に明記されている高士廉等の定氏族事業とAの關聯は如何に理解さるべきであるか？ 貞觀年間における天下の氏族を定める事業の決算として出來た「貞觀氏族志」とAが確かに別物であることは明瞭となつたが、右の事業の他の一成果としてAの如きが生れたと考へ得る餘地は未だ殘されている。ここにおいてA後文そのものの検討が要請される。

4. A・B 後文の虛構性

ここで一應後文の文意を左に譯載しておこう。「そのかみ太史は堯によつて九州を置いた。その地が今では八十（千は）五郡、計三百九十八姓を含む。今日、貞觀八年五月十日壬辰以後明らかに禁令を設け、前記郡姓出身者に限つて通婚を許す。結婚に先立つて從來の如く放任せず、必ず系譜を吟味しその郡姓たるを確認して始めて約定すべきである。右三百九十八姓以外の二千一百雜姓は史籍に載（戴は）せられておらず、三百九十八姓の範圍に入る者でも或いは（卑姓出身の）官人と通婚したり、若くは賤民より免ぜられて良民に復した者、又れつきとした系譜を有しても營門・雜戶・慕容・商賈など出身の者とは孰れも通婚してはならない。若し右の禁令を犯す者はその郡姓の籍を削除せよ。光祿大夫兼吏部尚書許國公高士廉等、

勅を奉じて天下の氏族を定めたる所、その結果を列擧表示しなければ依據するに難いであろう。よつて命に従つて委細處理しおわり登録する所右の如くである。

勅旨 奏に依れ。” 一讀して種々不審を覺えるこの文に牟氏が疑惑を抱かれたのは當然である。後文について疑問となる點を、必ずしも牟氏の所論に拘わらず整理してみると左の如くなる。

○後文に明瞭な外的誤謬が存在すること。例えば “貞觀八年五月十日壬辰”は長曆に合はず、又 “光祿大夫兼吏部尚書許國公士廉”の記載には不備があり、その他全體に文章の不明確な所が少くなく、勅定された公文書としてはあるまじき曖昧・疎略を印象付ける。

○後文の趣意に内容的明確さを缺き、且つ後文の述べる如き機能をAが持ち得るか疑問を残すこと。

○貞觀年間に後文にみる如き通婚範圍の制定が行われたことを傳える確實な史料が他に見出されないこと。

右の三點はその一條一條を取上げて吟味すれば、後文の眞實性を否定するに足る決定的理由とは必ずしもなるまいと思われる。何となれば、Aは貞觀八年⁽⁶³⁴⁾より二百年以上を距てて抄寫されたものであるから、譌誤・脱漏或いは不當な改變の加えられている可能性があり、Aの誤りを以て直ちに原文の不備に歸することは困難だからである。又Aは卷頭を缺いており、Bとの比較から各姓毎に望を列擧する形式の部分をも本來有していた可能性が認められ、更にその他の解説的文言をも卷頭に存したかも知れず、Aの機能を現存部分のみで考えることは早計であらう。更に貞觀年代の諸事件を傳えた遺存史料は極めて限られており、史料に見えないことは決してその非存在を立證する根據とはならない。⁽¹⁹⁾しかしながら右の三點を綜合するとかなり有力な論據となることは否定し得ない所である。これに對し今迄の所後文の眞實性を積極的に示唆する何らかの證徴が提出されてはいない。ここでA後文に對應する文言をもつBを考慮する必要があると感ぜられる。A・B後文を對置し

てみると次のようである。

A 以前太史因堯置九州今爲八十五郡合三百九十八姓

B 太史因堯置九州令分□□

A 今貞觀八年五月十日壬辰自今已後明加禁約

B □□□月十日□□

A 前件郡姓出處許其通婚媾結婚之始非舊

B □□

A 委怠必須精加研究其囊譜相承不虛然可

B □□

A 爲足其三百九十八姓之外又二千一百雜姓

B 定偶其三百九十八姓□□

A 非史籍所載雖預三百九十八姓之限而或媾官混雜或從賤入良營門雜

B 並非史籍所載□□

A 戶慕容商賈之類雖有譜又不通如有犯者剔除籍光祿大夫兼吏部尙書許國公士

B 戶商賈之類上柱□□

A 廉等奉 勅令臣等定天下氏族若

B 甫等 奏勅令□□

B
各別爲條舉

B
聽
進

76

決定的にするであろう。何故なら、かかる郡姓を列挙しその間の内婚制を規定した文言を有する文獻が、極めて無造作に改竄された形で通行している事實は、同種文獻の權威を全く失わせるに足るからである。

では一體何人によつて、如何なる意圖にもとづいてAの如き文獻が作製され、貞觀年間の定氏族事業に託す文言が虚構されたのであろうか？これに對する牟氏の解答は次のようである。この種の文獻は、山東大姓中の袁宗疎房に屬する者が賣婚價格の吊り上げを意圖して拵えたものであると。すなわち山東の舊姓中には太宗の氏族政策に反感をもつ者が多く、傳統の門地の優位をあくまで保持せんとする氣風の存したことがかかる身分内婚制をうたつた文書を生んだ背景であり、そして貞觀氏族志の如く各姓につき諸房間の高下迄詳細に登載されることは同姓中の卑房の者に不利である爲、單に某郡の何姓とのみ記載してこの不利を免れんとした所にAの如きが作製されたと解される^⑧のである。しかし牟氏のこの論は頗る説得力に乏しい。買婚の前提としては當然身分的に高下の懸隔したヒエラルヒーが存在しなければならない。然るにAに示された所は三九八姓間の通婚であり、全國的に列挙された三九八姓は全貴族階級を網羅するものに他ならない。なるほど個々の郡についてみれば、配列順序が各姓間の高下の順位を示している場合もある^⑨。しかしながら八五郡が全く平面的に列べられている以上、三九八姓相互間の上下の區別はこれを認めることが不可能である。現實に買婚の對象とされたのは數個の限られた天下の大姓であつたから、それらの特異な地位を没却したAの如きは却つて買婚の前提を失わせる効果を持つに過ぎまい。且つ某郡某姓というだけでは甚だ曖昧であつて、その範圍を如何に限定すべきかが示されない限り實際の婚姻訂結に際し参照される文獻たり得ないであろう。ここにおいて我々は一層廣い視野に立つてこれら文獻の性格を考察すべき必要を感じる。そこでまず當面の對象たる敦煌資料の内容と密接な關連のある文獻記載を吟味することから始めたいと思う。

II 郡望表の概念

1 文獻に傳えられた郡姓記載

敦煌發見氏族資料と對應する記載を文獻に求めると、太平寰宇記・廣韻に含まれる郡望記事がややまとまつたものとして注目され、他に先に觸れた古今姓氏書辯證の郡姓記事のような斷片的な場合も見出される。そこで以下これら關連記録を抽出して比較検討してみよう。

一、太平寰宇記所載郡姓

本書の各府州記事に時として“姓氏”の欄が設けられ、そこに某郡幾姓の記載が見えることはよく知られている。次にこうした郡姓記載を卷を逐つて抜書し列舉しておく。

1	陳留郡	五姓	防謝何虞蔡	開封府	1
2	河南郡	九姓 ^①	賀邱褚祝蘭竇南宮穆獨孤	河南府	3
3	恒農郡	五姓	楊劉强晉奚	虢州	6
4	潁川郡 ^③	八姓	陳荀鍾許庫于鮮于鮮	許州	7
5	白馬郡	三姓	費成公上官	滑州	9
6	譙郡	九姓	殷周袁應和荆梅齊汝	滑州	9
7	滎陽郡	四姓	鄭毛潘陽	鄭州	9
8	梁國郡	三姓	宋張喬	宋州	12

25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9

唐代の郡望表(上)

池田

□ □ 平 平 山 魯 濟 成 齊 千 樂 下 蘭 沛 彭 濮 濟 東
□ □ 昌 昌 陽 國 陰 陽 乘 安 邳 陵 城 陽 陰 平
郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡

五 三 五 三 七 四 三 四 二 九 三 一 三 六 七 五 四
姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓

邵隸徐史錢 管孟牟 胡周羊曹孫 鞏鄒蹇 夏孔唐車顏栗宰 苗董卞鄒 成毋益^⑦ 史寧左梁 倪庾 孫任高薛閻仲蔣房亢 陳祁谷 蕭 朱張周 劉袁曹到徐巢^⑥ 吳徐黃慶房袁扶^⑤ 蔡丁江曹易^④ 萬呂畢康

兗 兗 兗 兗 兗 齊 青 青 青 青 泗 徐 徐 徐 濮 曹 鄆
州 州 州 州 州 州 州 州 州 州 州 州 州 州 州 州 州
21 21 21 21 21 19 18 18 18 18 16 15 15 14 13 13

42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26
河東郡	上黨郡	高平郡	晉陽郡	平陽郡	西河郡	晉陽 ^⑪ 郡	太原郡	新平郡	安定郡	扶風郡	馮翊郡	始平郡	武功郡	京兆郡	琅邪郡	東莞郡
九姓	四姓	六姓	二姓	六姓	四姓	三姓	十一姓	三姓	四姓	六姓	五姓	四姓 ^⑨	二姓	八姓	六姓	四姓

裴柳薛費呂滿聶茹廉	包鮑樊上官	朱范巴瞿過獨孤 ^⑭	習景 ^⑮	柴賈解馬路鄧 ^⑫	任臨欒相里 ^⑬	魚儀景	王武郭霍廖郝溫閻咎令狐尉遲	古附異	梁席安皇甫	馬竇班輔魯惠	郭蓋雷黨吉	馮酈陰宣 ^⑩	蘇韓	韋杜扶段宋田黎金	王顏諸葛惠暢符	臧闕 ^⑧ 一作何公孫
-----------	-------	----------------------	-----------------	---------------------	--------------------	-----	---------------	-----	-------	--------	-------	-------------------	----	----------	---------	-----------------------

蒲州	潞州	澤州	晉州	晉州	汾州	并州	并州	邠州	涇州	鳳翔府	同州	華州	雍州	雍州	沂州	海州
46	45	44	43	43	41	40	40	34	32	30	28	29.25	29.25	25	23	22

59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43
吳興郡	錢塘郡	餘杭郡	吳郡	丹陽郡	雲陽郡	平原縣 ⁽¹⁹⁾	渤海郡	高陽郡	中山郡	趙郡	鉅鹿郡	清河郡	黎陽郡	內廣郡	魏郡	河內郡
四姓	二姓	二姓	四姓	四姓	三姓	六姓	三姓	五姓	五姓	二姓	五姓	六姓	四姓	三姓	五姓	八姓
姚沈邱紐	金范	暨隗	朱張顧陸	許佐甘紀 ⁽²⁰⁾	委言辛	師雍內義華東方	吳高歐陽	許紀夏伏公孫	旻甄隗楊蘭	李睦	莫魏時劉舒	崔張房尙傳靳	蘧桑衛柘	扈路駱	申暴柏暢 ⁽¹⁷⁾ 一作長 ⁽¹⁸⁾ 一作衰	梁河車常荀淳于司馬 ⁽¹⁶⁾
湖州	杭州	杭州	蘇州	潤州	益州	德州	冀州	冀州	鎮州	趙州	邢州	貝州	衛州	相州	魏州	懷州
94	93	93	91	89	72	63	63	63	61	60	59	58	56	55	54	53

76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60

武陵郡 平西郡 隴西郡 天水郡 武陵郡 武昌郡 南陽郡 臨海郡 廣陵郡 長沙郡 江夏郡 潯陽郡 豫章郡 南安郡 緡雲郡 會稽郡 長城郡

六姓 二姓 八姓 七姓 三姓 六姓 十一姓 四姓 四姓 五姓 三姓 三姓 五姓 五姓 三姓 七姓 二姓

賈陰索安曹石 申屠曹 李牛彭辛聞蹇艾蓋 權趙尹莊龍狄姜 卞伍龔 吳伍程史龍郢 張樂趙并何白韓鄧姬周滕 邵屈戈續 戴高盛游 劉茹曾秦彭 黃喻潘 陶翟騫 熊羅雷湛章²² 黃林單威仇²¹ 黃賴豐 虞孔夏榮鍾茲謝 錢胥

涼州 涼州 渭州 秦州 荊州 荊州 鄧州 合州 揚州 潭州 鄂州 江州 洪州 泉州 處州 越州 湖州

152 152 151 150 146 146 142 136 123 114 112 111 106 102 99 96 94

右表の最下欄は、太平寰宇記の府州名及び卷數。本文は光緒八年刊の金陵書局本に依り、宮内廳書陵部所藏南宋板零本及び南昌萬廷蘭本と紅杏山房板の兩清代刊本（夫々宋本・萬本・杏本と略稱）との異同を左に注記しておく。但し卷一一三より一一八の間は宋本にのみ存する部分故宋本に依つてある。

- ①九；杏本作五。 ②邱；宋本作丘。 ③穎；宋本・萬本共作穎。 ④黃；萬本作房。 ⑤房；萬本作黃。 ⑥萬本到以下三姓缺。 ⑦毋；萬本作母。 ⑧關；萬本作闕。 ⑨四；萬本卷二五作二。 ⑩萬本卷二五缺陰宣二姓。 ⑪陽；萬本作□。 ⑫賈；萬本作解。 ⑬解；萬本作賈。 ⑭朱；萬本作米。 ⑮瞿；萬本作翟。 ⑯萬本有下一姓闕四字。 ⑰鳴；萬本作鳴。 ⑱長；萬本作長。 ⑲縣；當作郡。 ⑳佐；萬本作左。 ㉑威；萬本作威。 ㉒湛；萬本作湛。

太平寰宇記には宋本を以て補つてもなお關佚部分（卷四・一一九）が存するが、卷四は河南府の下に當り姓氏の項は卷三に既出であり、卷一一九は施・辰・錦・叙・溪諸州の如き邊鄙の地故恐らく郡姓は現れないと思われるので、本書に載せられた郡姓は一應右掲の範圍を出でないとみてよさそうである。現行諸本は總て南宋本を祖本としており姓氏の項については異動が極めて稀であるから、南宋時代の本書記載の面目は右によつて充分伺い得る。但し寰宇記原本と南宋本の間に已に幾分誤脱が生じているようである。例えば現行諸本の瀛州の條には姓氏の欄だけあつて缺となつて（卷六）が、本來郡姓記載のない州には姓氏欄がない體裁故、瀛州の郡姓記載が脱落したと見られる。又吳興郡四姓中の紐氏（卷九）は嘉泰吳興志（卷一）の引文によつて鈕氏に改めらるべきである。かような傳承の間に生じた誤脱の外に、本書本來の不備も存したようである。益州に登載された「雲陽郡三姓」（卷七）については卷末に左の校勘記が附されている。

按諸本云、雲陽郡三姓、委・言・辛。益州既無雲陽郡之名。又按古今姓氏書、委氏、漢有太原太守委進、不著何郡人。言氏、有言偃、吳人。辛氏、望出南昌。皆非蜀郡姓氏。當是誤見于此。今夔州乃雲安郡、多有辛姓。豈誤書雲安郡姓氏于此

乎。然委氏・言氏、今夔峽間、亦不聞有此姓。”（南宋殘本には丁度この校勘部分は缺けているが、雲陽郡三姓委言幸の記載。）（部分は現存し、この校勘が南宋版に附されていたものであることは疑いない。）これによれば、本書の成立當初から既に郡名の誤りと配置の不當が存在していたこととなろう。かような不備を有するとはいえ、七六郡三六二姓の郡姓を傳える本書の意義は大きい。ではこれら郡姓記載は何に基いているのであろうか？ 樂史の據つたといわれる總誌類——通典州郡門・貞元十道錄・元和郡縣圖志・舊唐書地理志等——には姓氏の記載はなく、他方各州圖經の類から郡姓がとられたとも考え難い。何故なら唐代の圖經は多く簡略であつたから、殆ど記述が姓氏に及ばなかつたと考えられ、又よしんば中に姓氏の記載を含むものが若干あつたとしても、それらによつて右掲の如き齊一な形式においてしかも七十餘郡にもわたつた郡姓記載が供給されたとは到底認め難いからである。とすれば残る可能性として、郡姓に關する專書の記載をば樂史が各府州下に排列したと考へてはいかがであらう。この解釋は樂史の編纂態度から見ても決して不自然でないと思う。寰宇記には各府州下に唐開元時と宋初の戸口數が掲げられている。全國的戸數統計は宋初開寶末年以後のものと思われ、本書編纂當時（980頃）に總誌若くは州圖經よりこれを轉寫することは不可能であつて、編者が直接戸數統計の記錄から夫々の府州條下に按配したとみななければならない。かかる戸數統計の場合を念頭に置いて郡姓記載の一律な形を見るならば、樂史によつて利用された郡姓表の類の存在を想像することは極く自然であらう。然りとすれば、前掲の郡姓記載は十世紀末に存在した郡姓表の姿を彷彿させることとなる。ここでA・Bの郡姓記載と本書のそれを比較對照してみよう。

A 缺

B 3 魏州魏郡五姓

寶 44 魏郡五姓

申暴栢暢長

申暴栢暢長

寔 7	B 11	A 12	寔 4	B 10	A 12	寔 20	B 9	A 16	寔 2	B 7	A 10	寔 46	B 5	A 10	寔 43	B 4	A 9
榮陽郡四姓	鄭州榮陽郡四姓	榮陽郡四姓	穎川郡八姓	許州潁川郡八姓	潁川郡七姓	濟陰郡四姓	齊州洛陰郡四姓	濟陽郡五姓	河南郡九姓	潁州河南郡九姓	河南郡七姓	黎陽郡四姓	衛州黎陽郡四姓	黎陽郡二姓	河內郡八姓	懷州河內郡八姓	河內郡九姓
		鄭州			許州			濟州			潞州			衛州			懷州

鄭毛潘陽	鄭毛潘陽	鄭毛潘陽	陳荀鍾許庫于鮮于鮮	陳韓鍾荀于許庫鱗?	陳荀鍾許庚庫	苗董下郟	苗董下都	董禾丁都苗	賀丘褚祝蘭寶南宮穆獨孤	賀褚穆祝蘭丘寶南宮獨孤	賀蘭丘士穆祝	蘧桑衛拓	蘧桑衛拓	蘧桑	梁河車常荀淳于司馬	宋向車常尋荀司馬淳于	宋司馬荀向浩淳于東尋
------	------	------	-----------	-----------	--------	------	------	-------	-------------	-------------	--------	------	------	----	-----------	------------	------------

襄 13	B 16	A 23	" 8	襄 12	B 15	" 14	A 23	襄 14	B 14	A 14	襄 5	B 13	A 13	襄 1	B 12	A 13
沛郡三姓	□州沛國郡三姓	沛郡三姓	梁國郡三姓	(彭城郡六姓	徐州彭山郡三姓	梁國郡三姓	(彭城郡五姓	宋州譙國郡九姓	白馬郡三姓	誰國郡八姓	滑州東平郡三姓	東來郡三姓	陳留郡五姓	汴州陳留郡五姓	陳留郡四姓	
		徐州				宋州	徐州	亳州			□州				汴州	
朱張周	周張朱	朱張周	宋張喬	劉袁曹到徐巢	焉張宋	宋喬張	劉曹袁行受	戴李石醢曹安桓龐夏	費成公上官	戴夏侯桓嵇曹婁龐	費成公上官	費盛上官	防謝何虞蔡	阮謝虞蔡何	元謝衛虞	

缺 (6 譙郡九姓 殷周袁應和荊梅齊汝 であるは、汝南郡に相當しよう。)

右にはBの遺存部分中、姓の記載が完存する十二郡について、A及び寰宇記所引郡姓の相對應するものを並べてみた。三者を通じて郡名の入れ違いや譌字脱字が少くないけれども、相互に密接な親縁關係を有つことは明白で、これらを同系の資料として一括考察する必要が痛感される。ここで姓數についてA・B・寰三者の相互關係を見ると、A・B間では一致四例・不同七例、A・寰間では一致四例・不同七例、B・寰間では一致十一例・不同無しであり、又擧げられた姓に關してもB・寰間の對應が最も顯著に見える。従つてA・B若くはA・寰の關係に比して、B・寰の聯關が際立つて密接なことが了解されよう。B・寰の間にも郡名(東平と白馬)・所載姓に少なからぬ差異は存するけれども、これらの文獻が傳寫の間に頗る多くの異動を生じている點に鑑みれば、姓數の顯著な對應の如きはその共通性に特に注目する必要を感じさせる。右に取上げた十二郡以外についてA・B・寰三者の關係をみても、ここに述べた相互關聯の特徴と特に矛盾する點は見出されない。そしてBがAより後出の文獻である點も、十世紀の寰がAよりBにより親密である事情に適合的である。以上によつてみれば、樂史の参照した郡姓表がAの改訂たるBに屬する一本であつたことは殆ど疑いなくであろう。従つて我々は寰宇記所載郡姓によつてBの大體、即ち後文にいう八五郡三九八姓なるものの凡その輪廓を想像することが可能な譯である。又AとBの間に、單に後文の年時・編者名のみならず郡姓の各々についてもかなり異動のあつた事情を數十郡に關し認め得ることとなる。なお吳興郡・長城郡の郡姓に關しては、李宗諤の〔祥符〕圖經や王曾の九域圖志等北宋時代の主要な總誌の記載が全く寰宇記と同一であつた(嘉泰吳興志卷一六)。こうした事情は必ずしも右の二郡に限つたことではあるまいから、寰宇記の郡姓記載が當代標準的なものとしてかなり通用していたと見られるであろう。

二、古今姓氏書辯證所收郡姓

辯證所收の貞觀所定郡姓については先に觸れたが、本書には唐代より以前の郡姓にも若干言及する箇所がある。次にそれ

らも含めて關連記載の要點を摘記しておこう。

(郡名)		姓數	姓	時定		辯證
1	安定	五姓	皇甫	貞唐	實氏譜	15
2	涇州安定郡	六姓	皇甫	貞唐	實氏譜	15
3	河東	三姓	柳・裴・薛	貞唐	實氏譜	38
4	河內	五姓	司馬	貞唐	實氏譜	4
5	懷州河內郡	七姓	司馬・淳于	貞唐	實氏譜	6, 4
9	河南	五姓	山	貞唐	實氏譜	8
7	洛州河南郡	十四姓	賀蘭	貞唐	實氏譜	33
8	滎陽	四姓	鄭・皇甫・崔・毛	貞唐	實氏譜	15, 5
9	鄭州滎陽郡	四姓	青陽	貞唐	實氏譜	17
10	號州江夏郡	三姓	黃	貞唐	實氏譜	15
11	廣平郡	四姓	宋・焦・談・游	貞唐	實氏譜	18
12	同州郃陽郡	四姓	達奚	貞唐	實氏譜	37
13	高陵郡	五姓	鮮于	貞唐	實氏譜	27
14	廣陵	四姓	戴・商・盛・游	貞唐	實氏譜	18
15	楊州廣陵郡	四姓	商	貞唐	實氏譜	13

32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16

唐代の郡望表(上)

池田

平昌郡 德州平原郡 沛國 泉州南安郡 曹州東陽郡 東平郡 坻上郡 太原郡 太原 涼州西平郡 汾州西河郡 貝州清河郡 青州齊郡 祁州新平郡 益州蜀郡 括州松陽郡 山陽郡

三 八 五 六 十一 四 六 十 五 六 四 六 四 三 三 三 五
姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓 姓

蓋 東方 劉・朱・周・武・薛 章・黃 黃 畢 多・獫 閻 郭 申屠 金・相 崔・張・房・何・傅・靳 寧 畢 羅・金 黃 蓋

唐 貞唐 賈 貞唐 貞唐 唐 貞唐 貞唐 賈 貞唐 貞唐 唐 貞唐 唐 貞唐 貞唐 唐 貞唐
徵 觀 譜執 觀 觀 觀 觀 譜執 觀 觀 公 觀 觀 觀 觀 觀 觀 徵

第四拾貳卷 40 2 38 15,13 15 36 40,12 20 38 6 33,19 5 34 36 19,12 15 40

三二五

33	果州武都郡	(七) 姓	倉・霍・藥	38,15
34	濮州武陽郡	七 姓	章	13
35	濮州濮陽郡	六 姓	黃	15
36	洪州豫章郡	六 姓	章・羅	13,12

辯證現行本は永樂大典中より輯められた四庫全書本に基いており、南宋版殘本との比較により姓の配列順序にかなり大きな相違をもつことが明らかである。しかし右の卷數は現行本に全て従い、本文中に異動の知られる場合は錢熙祚の校勘によつて〔守山閣叢書子部所收本に附載〕正しておく。なお排列は便宜的に郡名のアイウエオ順とする。

右を見れば明らかな如く、本書は郡姓を系統的網羅的に登載することを意圖しておらず、又各姓の説明に際し折に觸れて引合ひに出すにとどまり一定の方針に従つた取捨が加えられている譯でもない。唐貞觀所定とされた例が大部分を占めるが、他に秦漢而下、隋唐間、或いは賈執姓氏譜・魏太和姓族品などの郡姓も散見する。これら諸資料の原據は必ずしも明らかでなく従つてその信憑性にもなお問題が残されており、亦本書自体にも謬誤がかなり目につく（例えば卷一五引の“河西郡”は“安南郡”は“南安郡”に、卷一五引の“虢州江夏郡”は“鄂州江夏郡”に次々改めらるべきであり、又武都郡については同じ唐貞觀所定を卷一五では七姓・卷三八では五姓に作り一致していない。）けれども、他資料との比較の上から一定の價值を有すること勿論である。ここで辯證所引貞觀郡姓をA・B・寧宇記所引郡姓と比較すると、一致點がないではないがかなり相違點が多く、それらとは別の系統に屬するものと一應推測される。

三、廣韻所載姓望

敦煌發見氏族資料には某郡幾姓云々といった郡姓記載が多いけれども、Bの一斷片の如く某姓幾望として郡名を擧げる形式も見られる。この後者は、元和姓纂の如き姓書に見られる各望別の解説の見出しだけを抽出したようなものであるが、單

に郡名のみを列擧する點で姓書の具體的記述と異なる。この類の記載として、廣韻に含まれる各姓の姓望が注意される。⁽²²⁾ 現行本廣韻は前代の唐韻に増補修訂を加えて集大成されたものであり、特に天寶十載(751)の孫愔序を有つ所謂孫愔唐韻を主要な骨格としている。吳縣蔣斧氏舊藏の唐寫本孫愔唐韻とされる抄本(去聲・入聲の一部分のみ)と比較してみると、姓望の記述においても一致する點が多い。即ち去聲に屬する費・傳・路・顧・蔡・蒯・先・邵・到・賀・謝・華・向・寇・寶の十五姓、入聲に屬する陸・鞠・竺・畢・闕・帛・席の七姓の姓望記載に對應が確認される。兩者の比較によつて文字を正し得る例もあり、特に敬氏の「出平陽」一條は唐寫本唐韻によつて廣韻の誤脱を補ひ得る。他方寇氏及び寶氏の河南望は廣韻にのみ見えて唐韻に見えない。これは單に傳抄の間に生じた脱落と見ることは出來ず、廣韻が別の資料によつて補入したものと解されよう。その外廣韻にのみ現れる姓望記載についても、唐寫本唐韻の誤脱の場合も予想されると共に一方廣韻における増補の可能性を否定し得ない。結局姓望記載全體を通じて、廣韻は主として孫愔唐韻に依據しまた他資料を以て補つたとみて大過あるまい。廣韻の姓望記載は「出某郡」若くは「出某・某郡幾望」といつた形式を基本とするが、しかし記述の體例形式が必ずしも一定せず、當然擧げられて然るべき望の漏れていると思われる場合も屢々あつて決して網羅的とはいえない。けれども本書の含む姓望記載は百八十餘姓に及び、中には劉氏廿五望・王氏廿一望・張氏十四望など多数の望を登載した例もあり、現れる郡名は百十を超える。宋初以降頗る廣範圍に流通し多数の人々に知識を提供した本書の記載はこれを輕々に看過することは許されない。特に姓望記載の主要部分が孫愔唐韻に系統をひき、従つて八世紀半ばに通行していた姓望記載を傳えていると解される(孫愔以前の、陸法言切韻以下切韻系統の諸韻書に)はかかる姓望記載は一切見當らないようである。⁽²³⁾ においてはなおさらである。

文獻に傳えられた郡姓・姓望記載は右に盡きる譯ではないが、敦煌資料と比較検討さるべき最もまとまつた記録として特に詳説した次第である。これらを念頭において、一聯の氏族資料を眺めると、その正しい把握に歩を進めることが可能とならう。

註

- (1) 宋代の學者の姓氏に關する代表的著作、鄭樵の通志氏族略や王應麟の姓氏急就篇などは、姓源に専ら注意を向けている。ただ汪藻の世說敘錄に含まれる世説人名譜は、六朝門閥系譜研究の先驅と稱し得よう。この世説人名譜が六朝傳來の舊譜によつたものではなく、正史・世説など諸資料から再構成された事情については矢野主税「世說敘錄の價值について」(史學雜誌六六一九 一九五七)にくわしい。
- (2) 周嘉猷撰 南北史世系表五卷・沈炳震撰 唐書宰相世系表訂譌一二卷・王家振撰 王氏通譜 などがわずかに目につく。
- (3) 宮川尙志「六朝史研究 政治・社會篇」(一九五六)特に第三章六朝貴族社會の生成・第四章中正制度の研究・第五章魏晉及び南朝の寒門・寒人・第六章北朝における貴族制度。
- (4) 守屋美都雄「六朝門閥の一研究—太原王氏系譜考—」(一九五一)。
- (5) 竹田龍兒「唐代士人の郡望」(史學二四—四 一九五一)・同「門閥としての弘農楊氏についての一考察」(史學三一—一四合併號 一九五八)。
- (6) 宮崎市定「九品官人法の研究 科舉前史」(一九五六)。
- (7) 矢野主税「張氏研究稿—張良家の歴史—」(長崎大學學藝學部社會科學論叢五 一九五〇)・同「門閥貴族の系譜試論」(古代學七一—一九五八)・同「鄭氏研究」(長崎大學學藝學部社會科學論叢八・九 一九五八・九)。
- (8) 王伊同「五朝門第 附高門世系婚姻表」(金陵大學中國文化研究所叢刊利乙種 一九四三)筆者未見。
- (9) 岑仲勉「元和姓纂四校記」(中央研究院歷史語言研究所專刊二九 一九四八)。
- (10) Wolfram Eberhard: Das Toba-Reich Nordchinas (1949) 特に Kapitel 3, Die Hundert Familien.
- (11) ポール・ペリオ氏將來敦煌漢文文獻第二六二五號。ポール・ペリオ・羽田亨兩氏編になる敦煌遺書活字本に「燉煌民族志殘卷」として全文移録されている。墨界を施した卷子に書寫され、前後を缺き現存九四行。陰氏の項のみ完存し、張氏の末部と索氏の頭部を留める。この内容の成立年代は、大足元年(701)から五年間涼州都督に在任した郭元振の判に言及していること、陰仁協の肩書が聖曆三年五月(700)S八七 金剛般若波羅密經跋より榮進している點、又本卷に見える陰嗣璠は後榮進したことが知られ(大番故燉煌郡莫高窟陰處士公修功德記)、嗣璠の子庭誠は大曆十一年(766)に攝燉煌州學博士として義兄の爲に隴西李府君修功德碑記を書いている點、などから八世紀前半、おおむね開元年間と推定される。書寫時期も八世紀末を降らないように見える。張氏・索氏の項では敦煌に移住した遠祖の事蹟が述べられるに對し、陰氏では隋唐以降だけが觸れられるといった各氏間の差異はあるけれども、唐代の官階職任乃至勳封の記載が極めて周到でありしかも現任を明記している點、一族中の無官者や女子などは全く登載されていない事實などよりみて、

これが單に私家の譜牒の集録ではなくして公的意圖に基ずいて作製された文献であることは推測に難くない。従つて當代における名族と國家の關係を考える上に、本殘卷の示唆する所は頗る大きいと思われる。

- (12) アウレル・スタイン氏將來敦煌漢文文獻第一八八九號。現存九七行。標題を缺くが、向達氏の命名が内容的に妥當と考えられるので暫くそれに従う。本卷は大別して二部分よりなり、前半は散文及び頌形式の韻文を以て汜氏の出自・譜系を敘し、敦煌の望族となるに至るまでを概觀する。後半は汜襲以下敦煌汜氏の著名人十一名の列傳である。内容的にみて本卷は途中で鈔寫が中絶されたものの如く、又少からぬ誤字脱字を含んでいるとはいえ、列傳部分は五世紀初に劉昫の撰した敦煌實錄に多く依據しているとみられ、他の史傳に何えぬ二・四世紀の敦煌汜氏の事蹟を多く傳える點、極めて貴重な文獻である。又六朝から唐へかけての家傳の様相を何う上にも見逃し得ない存在といえよう。前注及び本注で觸れた氏族關係文獻に關する詳細は別の機會に譲る。

- (13) 貞觀氏族志に關しては、仁井田陞前掲書・陳寅恪「唐代政治史述論稿」・竹田龍兒「貞觀氏族志の編纂に關する一考察」(史學二五・四)など参照。

- (14) もつとも遂初堂書目(海山仙館叢書本)姓氏類には、「大唐氏族志」が著録されている。けれども說郛易十所收本には個個所が「大唐氏譜」となつていて、この方が原型と見られる。それ

ゆえ本書目作製時に大唐氏族志が存在したとみえることは許されない。

- (15) 孫思衍は、林寶が元和姓纂を編する際に姓氏錄や姓族系錄などを見るを得たであろうと述べている(校補元和姓纂輯本序)。しかしその證據は示されていない。私見では、姓纂において姓と房(家)との關係が必らずしも明確に扱われていない點、登載者の官爵の記載が周到嚴密でない點などから、官撰の氏族志以下に依據する所あつたとは考え難い。

- (16) 貞觀政要卷七論禮樂の集論に引用された唐仲友・林之奇・戈直の文を見よ。

- (17) この點を解決すべく「貞觀六年六月十日壬辰」(宇都宮清吉)・「貞觀八年五月十日庚辰」(牟潤孫)の誤りとみる説が出され、又「貞觀八年三月廿日壬辰」・「貞觀八年五月廿二日壬辰」の可能性も考慮されている(仁井田陞)。しかし孰れも決定的ではない。

- (18) 貞觀十一年、貞觀令において始めて光祿大夫(從二品)の階が設けられたのであり、それ以前は左・右光祿大夫(從三品・正三品)のみ存在した(仁井田陞「唐令拾遺」二四・一五頁、一〇・一二頁)。それ故これが貞觀八年當時の記載のままでないことは明らかである。當時高士廉は左光祿大夫であつた(嚴耕望「唐僕尚丞郎表」四九〇頁)。

- (19) 試みに太宗の詔勅についてみても、「獲石瑞曲赦涼州詔」(文館詞林(卷六六七))「與千乾長勅」(同卷六)の如きは幸運にも我が國に偶然

残つた文館詞林殘卷によつてのみ我々の眼に觸れるのである。

(20) 仁井田陸「支那身分法史」五八八—九頁参照。

(21) 青山定雄「隋唐より宋代に至る總誌及び地方誌について」下

(東洋學報二八—二九) 八〇頁参照。

(22) 廣韻に含まれる姓望を郡名によつて整理すると左の如くなる。各郡の配列は便宜的に郡名のアイウエオ順に従う。各郡下の姓の順位は何ら意味をもつものではない。姓によつて檢索することは比較的容易であるから、他の郡姓記載と比較の便宜の爲試みに郡を見出しとして表示するにとどまる。

1 安定	胡・梁・張・程・皇甫・路・鄭・席	12 河南	向・荀・封・于・朱・嵇・甄・陳・元・孫・潘・高・柯・和・車・梁・房・王・明・劉・周・丘・侯・閻・褚・鮑・荀・宋・路・賀・寇・寶・陸・郭・邵	19 漁陽	高・曹・魏	40 壽春	鄭・嵇・桓・夏侯
2 安樂	孫	29 高堂	劉	30 弘農	楊・劉	41 譙郡	嵇・桓・夏侯
3 安陸	鄭	31 高平	郗・徐・檀・曹・張	32 廣平	程・游・宋	42 譙國	曹
4 右北平	陽	33 高密	劉	34 高陽	許	43 上谷	成・侯
5 衛國	閻	35 廣陵	陳・蕭・高・劉	36 吳郡	朱・孫・張・顧・陸	44 襄城	李・路
6 潁川	鍾・陳・荀・韓・庚	37 吳興	姚・丘・沈	38 山陽	王・滿	45 章武	王
7 會稽	虞・留・樓・賀・謝	39 梓潼	李	40 太原	狐・郭	46 襄陽	杜・蒯・習
8 河間	邢・劉・尹			41 濟陽	虞・丁・范・蔡	47 汝南	梅・陳・袁・和・周
9 下邳	皮・陳・趙・枕・闕			42 濟陰	丁・董・卞・邵	48 新蔡	胡・王・薛
10 河東	裴・王・賈・柳・衛			43 清河	崔・房・張・傅	49 晉昌	唐
11 河內	先・薛・弋			44 西河	荀・宋・閻	50 新野	王・庾
				45 濟南	房	51 尋陽	周
				46 西平	麴	52 濟陽	王・庾
				47 濟北	氾・戴	53 濟陰	丁・董・卞・邵
				48 宣城	劉	54 清河	崔・房・張・傅
				49 太原	狐・郭	55 濟南	房
				50 宣城	劉	56 西平	麴
				51 濟陽	虞・丁・范・蔡	57 濟北	氾・戴
				52 濟陰	丁・董・卞・邵	58 濟陽	虞・丁・范・蔡
				53 清河	崔・房・張・傅	59 宣城	劉
				54 西河	荀・宋・閻	60 太原	狐・郭

61 泰山 羊・周・鮑・畢
62 丹陽 陶・劉・紀
63 中山 甄・張・王・郎・劉・李
64 趙郡 苻・李^⑧
65 長沙 羅・歐陽・王・劉
66 長樂 馮
67 陳郡 殷・袁・何・謝
68 陳留 江・邊・王・周・阮・路・衛
69 天水 權・楊・梁・姜・王・閻・隗・尹・趙
70 東海 徐・于・陳・何・王・劉・鮑
71 東莞 童・徐・孫・臧・劉・竺^⑨
72 東郡 成・郭
73 東平 王・劉・呂
74 堂邑 王
75 東陽 路・鄭・駱
76 東萊 王・鞠
77 頓丘 閻・劉・李
78 燉煌 張・令狐・汜・宋

79 南安 索・龐・焦・姚
80 南郡 劉
81 南昌 余
82 南頓 應
83 南平 車
84 南陽 宗・龐・樊・韓・張・劉・李・趙・范・鄧
85 任城 魏・樂
86 沛國 朱・張・劉・周・薛
87 博陵 崔
88 范陽 盧・張・李・祖
89 馮翊 魚・游・寇・郭
90 武威 張・陰・段・孟
91 扶風 蘇・班・魯・馬・宋・寶
92 武邑 蘇
93 平原 明・劉・禰・管・華
94 平昌 孟・伏^⑩
95 平陽 路・敬・莢^⑪
96 彭城 袁・曹・劉・到・鄭
97 北海 逢・王・唐

なおテキストは古逸叢書覆宋本を景印した四部備要本による。

(東洋文庫研究生)

- 98 北地 傅
99 北平 田・邊
100 濮陽 徐・吳・爰・杜
101 渤海 同路^⑫・封・刁・高・李
102 樂安 任
103 蘭陵 蕭・劉
104 梁郡 劉
105 梁國 橋・張・李
106 遼東 高
107 臨川 周
108 臨淮 劉
109 隴西 牛・董・李
110 琅邪 徐・顏・王・劉・惠
111 廬江 何・周・鄺
112 魯國 車・唐・夏侯^⑬
113 淮南 車
(絳州) 郇
⑧ 或作商。
⑨ 唐韻作出東苑。
⑩ 作出陽平。今據唐韻。
⑪ 今據唐韻補。
⑫ 作出勃海。
⑬ 作出魯。